



“出会い”のタネが芽吹く季節

2月×日

今年度ももう終わりだなあ。3学期の中間試験も終わつたし、残すところあと1か月。

さて、今日の授業はどうしよう…。試験終了後最初の授業だし、いきなり試験返しというのもなんだなあ。そうだ、そろそろ頃あいだから「あれ」を見せようか。さあ、今年はどんな感想が返ってくるかな。ちょっとドキドキするなあ。

* * *

1年間、子どもたちと一緒に教室の中で過ごしていると、時として驚くような出会い直しをすることがあります。先日も授業中の雑談で「名前だけでは韓国人かどうかわからへん。通名を名のらざるを得ない人がたくさんいるからなあ」と言ったら、「こいつもそうやで！　じいちゃんは韓国人や。なあ！」と言い返してくる生徒がいました。「へー、そうなん？」と言われた子にたずねると、「そうやで。いまは日本国籍やけどな」と返してきました。

この子以外にも、両親が離婚している子はもちろん、リスカ経験のある子、ODの経験のある子等々、さまざまな子がいます。年度当初は同じ制服を着て同じような顔に見えていたのに、3学期に入る頃には、一人ひとりが、わずか16年～18年でしかないにもかかわらず、それぞれの人生を歩んでいるということがわかってきます。

わたしたち教員は、生徒たちについて驚くほどたくさんの情報を持っています。入学時はもちろんのことですが、時間がたつにつれ、その情報量は増えています。それは、生徒たちとのつきあいが深くなるからだと思います。

ところで、わたしたち教員は、わたしたち自身のことを生徒たちに伝えているのでしょうか。

10年ほど前、「最近の生徒たちは雑談（授業以外の話）を聞かなくなつたなあ」と感じたことがありました。「雑談してるんやから、お前ら聞けや」と言うのに嫌気がさして、いつの頃からか雑談を

せずに、淡々と授業をするようになりました。聞かせることをあきらめると、とても楽でした。でも、それと同時に、徐々に子どもたちとの「距離」が離れていったような気がします。

そんなある日、あることがきっかけで、あきらめていた自分が間違いであったことに気づきました。それ以来、折にふれて雑談をするようになりました。内容は、その日あった出来事であったり、社会の動向であったり、授業にまつわることであったり、さまざまです。たしかに聞かない子もいるのですが、まっすぐこちらを見つめてくれている子がいることに気づいた時、その子に思いが伝わるように話すようになりました。どうやら、それが「わたし自身を語る」ことだったようです。雑談をはじめると、子どもたちとの距離がだんだんと近づいてきたような気がしました。

わたしが100円の情報しか出さなかつたら、子どもたちも100円分のつきあいしかしてくれません。でも、1万円の情報を出せば、子どもたちは10万円の価値の情報を出してくれます。子どもたちの10万円の情報に対して、わたしも10万円の情報を返したいと思います。そんな関係になれるのが「いま」まさに「頃あい」なんだと思います。

「あれ」というのは、かつてわたしが取材を受けたテレビの録画DVDのことです。ほんとうは自分でしゃべらないといけないのですが、映像の力には勝てそうにありません。ちょうど家族のことや仕事のことで取材を受けた番組があるので、安いだとは思いながら、それを見せることにしています。

感想文を読むと、いろいろ気を使いながらも、精一杯わたしを受けとめてくれている気持ちが伝わってきます。で、今年の感想文の中の最大のヒット作。「ずっと土肥ちゃんが男か女かわからへんかった。でも、いつの間にか女と思って接してた。これからも数学教えてな」。えへへ、うれしいなあ。

（土肥いつき 高校教員）